発達理論の学び舎

Back Number: Vol 82

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1621. 非日常体験の意義
1622. 昨夜の夢と一昨夜の夢
1623. 教育的介入手法の評価
1624. アーネムとユトレヒトに向けて
1625. 卒業証書授与式
1626. 経験の発酵と醸成
1627. ヘリコプターと翼
1628. 科学への疑義
1629. 共同論文の執筆に向けて
1630. 論文レビューが引き起こす恍惚感
1631. 後ろ髪を引くもの
1632. 課題の整理
1633. 仮想通貨に関する夢
1634. 無能さと無知の果て
1635. 新たな友人
1636. 消えない灯火
1637. 科学としての教育学
1638. 振り出しに戻る夢
1639. 時の螺旋階段
1640. コース課題の進捗

© YOHEI KATO 2018

1621. 非日常体験の意義

雨音と共に一日が始まった。今日は五時半に起床し、六時から仕事に取り掛かり始めた。

フローニンゲンで過ごす二年目は、均衡のとれた流れの中で毎日を積み重ねていくことができている。欧州での生活は今年でまだ二年目だが、この土地の深層に存在する流れと同化することができ始めているように思う。

非常に落ち着いた流れと共に毎日を歩んでいるという確かな感覚。それがあるために、日々の生活がとても充実したものとして知覚される。そして実際に、日々の経験が充実した形で自分の中に徐々に堆積していくのを感じる。

今朝は早朝の闇、そして雨にもかかわらず、自分の心身の状態は、闇的でも雨的でもない。それとは対極をなすようだ。

明日は一年目のプログラムの卒業式に参加する。卒業式は、フローニンゲンの街の中心部にあるメインキャンパスで行われる。式が実際に行われる部屋はおそらく、私が一年目の最初にオランダ政府から奨学金を得た式が行われた場所だと思う。式の会場は、格式高く、とても厳かな雰囲気を醸し出しているあの部屋だろう。

この式には、自分の近親者や縁のある人を招待できるようになっている。また、プログラムの最中の自分の学術活動の様子をよく知っている人物に、式の際にスピーチを行ってもらうことになっている。私は、昨年一年間論文アドバイザーを務めてくださったサスキア・クネン教授にスピーチの依頼をした。クネン先生はそれを快く引き受けてくださり、明日の式では先生のスピーチと共に学位取得証書を与えられる。

これまでは、あまり式典関係の意義を理解していなかったが、この年になってみると、そうした式は、絶え間なく続く区切れないものにあえて何かを区切るという大切な意義があることに気づく。また、式が持つ非日常性という特質も忘れてはならない。連続的な日常をさらに深く生きる上で、非日常的な体験は、日常を俯瞰的に捉え直すことを通じて、日常の深層に戻ってくることを可能にする。

© YOHEI KATO 2018

日常を離れ、旅から戻ってきた際に感じるあの感覚。一旦日常から離れ、再び日常に戻ってくると、日常を捉える眼や感じる心に変化が生じているあの感覚。そうした非日常体験をもたらしてくれるのは、各種式典の持つ大切な意義と価値だろう。

明日の式では久しぶりにスーツを着ようと思う。フローニンゲンの街に来てからスーツを着たことなど一度もなかったように思う。昨年に参加した各種の学会においても、私はスーツを着用していなかった。

非日常体験をもたらす式典の意義を毀損しないように、身なりを整えることは大事だろう。身なりを整えることは、身体の外を整えるだけではなく、身体そのものを整える。そして、それは自分の心を整えることでもある。それらが整うことによって、非日常体験をもたらす環境がさらに強く私に何かを働きかけてくるだろう。明日はあいにくの雨のようだが、今の私の気分は晴れやかだ。2017/10/5（木）06:27

No.266: The Hoge Veluwe National Park and Kröller-Müller Museum in Arnhem

I woke up before 5AM just after one dream ended. Yet, because it seemed to me that I needed more sleep, I decided to go back to sleep. When I woke up again, it was 7AM. I could hear the sound of rainfall. Today is rainy, too.

Yesterday, I was planning to visit Arnhem and Utrecht, both of which I have never visited so far. Arnhem has a national park, Hoge Veluwe National Park, which is quite intriguing to me because of my propensity of nature mysticism.

The Hoge Veluwe National Park has the Kröller-Müller Museum, which has the second largest collections of paintings by van Gogh. Since I visited the Van Gogh Museum in Amsterdam two and half years ago, I have been obsessed with van Gogh's life and his paintings.

Because I wanted to spend as much time as possible in this museum, I determined to stay at a hotel near the national park in the middle of November. I will visit the national park next month, which would be the best season to see autumn color of leaves. 08:29, Friday, 10/6/2017

1622. 昨夜の夢と一昨夜の夢

早朝の七時を過ぎたあたりに、ようやく闇に包まれた空がダークブルーに変色をし始めた。この深い青の世界は、どこか深海を彷彿させる。深海を泳ぐ鳥は一羽も見えない。鳥たちが海を泳ぎ始めるのはもう少し後だろう。

起床直後に、少しばかり昨夜の夢を振り返っていた。私はだだっ広い宴会会場にいた。この宴会会場にどれだけ多くの人が入るのかわからないほどに大きな会場だった。

掘りごたつ式の長いテーブルがいくつもの列をなしている。私は、宴会会場の外で靴を脱ぎ、会場の入り口から最も近い列の次の列の真ん中の席に腰掛けた。正直なところ、この宴会が何の目的で行われ、どのような人が参加するのか不明であった。しばらくすると、続々と人々がこの宴会会場に押し寄せてきた。

私のテーブル席には見知らぬ女性たちが座った。歳は同じぐらいだろうか。どうやらその方たちは、宴会の参加者ではなく、料理を運んできてくれる人たちのようだった。そして、私の目の前においしそうなうどんが運ばれてきた。私の左隣に座っていた女性が、このうどんの食べ方を丁寧に説明し始めた。その説明通りにうどんを食べ始めると、今度は右斜め前に座っている女性が、この宴会の趣旨について話をしてくれた。なにやら、この宴会は同じ趣味を持つ人たちの集まりらしい。

テーブルの列ごと、厳密にはテーブルの一角ごとに異なる趣味の人たちが座り、そこで交流を図ることが目的になっているとのことである。しばらく時間が経っても、私が座っているテーブルの一角には誰もこなかった。そこで私は、他のテーブルの人たちがどのような趣味を持っているのかに関心があったので、各テーブルの様子を伺いに行くことにした。世の中には、実に変わった趣味を持つ人たちがたくさんいるのだと改めて知った。

様々なテーブルに行き、そこでなされている会話に興味深く私は耳を傾けていた。しばらくしてから、私はこの宴会会場を後にすることにした。

© YOHEI KATO 2018

宴会の場で食べたのはうどんだけであり、飲み物はお茶しか飲んでいなかったように思う。会場の入り口から外に出ると、テーブルごとの趣味の一覧が、大きな木製の板に刻まれている光景を目にした。無数にある木製の板の一つ一つを眺めていると、静かに夢から覚めた。

昨日の夢が引き金となり、一昨日の夢に対してどのような解釈ができるかを少し考えていた。一昨日の夢は、空港と併設した大きなショッピングセンターに足を運ぼうとしていた内容であった。あの夢はどこか、異国の地での生活の見えない困難さを物語っているような気がしてならない。国際線に乗る者の道と国内線に乗る者の道の長さが異なり、道の傾斜角度があれほどまでに異なっていたのはそのせいかもしれない。

多くの人は国内線用の道を歩き、なぜだか私だけが国際線用の道を歩いていた。国際線の乗客用のビルの中で乗ったエレベーターも様々なことを暗示している。そのエレベーターは、想像以上に高い場所に一気に向かっていった。目的地の場所が何階にあるのかがわからず、途中で降りる階も見つからない。国外での探究生活は、多分にそのような性質を内包している。

行き着く先の究極的な地点など見えず、どこで腰を落ち着けるかの地点もままならない。また、あのエレベーターが尋常ではない速度で上昇していたように、私の内側を流れる時間や内面の成長を外側から強制的に加速させようとする力を感じることが多々ある。そうした様子は、まさにあの夢が描いていた通りである。

さらに、エレベーターの速度と高さにいてもたってもいられなくなった私が降りた階の光景も印象的だ。そこで見た光景は、とてもありふれたものであり、落ち着いたものだった。

エレベーターを降りたのは36階であった。36年後、私は67歳になる。そこで初めて異国の地での生活を終えることになるのだろうか。あるいは、エレベーターが出発して初めて見えた69階、つまり69年後の100歳になった時に初めて、この異国の地での生活に終止符を打つのだろうか。それらのどちらが実現するのかは、今のところ全くわからない。あるいは、それら以外の終わり方をするかもしれない。ただ一つ明確に言えることは、異国の地での生活は、高いものに向かって長く険しく伸びていく果てしない道だ、ということである。2017/10/5（木）07:52

© YOHEI KATO 2018

No.267: Connections with Humans and Places

We may often think of human connections, but how about connections with places? I sometimes cannot help but think of such connections with places in this reality.

Before starting my life in Groningen, I lived in Tokyo, Los Angeles, New York, and San Francisco in the last five years. My attachment with those places is strong. Whenever I determine to take on new challenges, the right place always shows up before my eyes.

It is almost impossible to elucidate the mechanism of this phenomenon, but it occurs to me at the important moment in my life. All of the places that I need suddenly appear with some reasons at the right moment. I have no other choice but to think that we are always living with the grace of connections with humans and places. 08:49, Friday, 10/6/2017

1623. 教育的介入手法の評価

今日は極めて風の強い一日である。午前中は雨模様の中、激しい風が辺りを吹き抜けていた。

昼食時に食卓の窓から外を眺めると、鳥の大群たちが空を紙吹雪のように舞っていた。その動きは極めて不規則であり、強風の影響を強く受けていた。しかし、それでも鳥たちはどこかに向かって飛ぼうとしていた。

今日は午前中に、「学習理論と教授法」のコースで課せられている最終論文に取り組んでいた。この課題は、グループで取り組むことになっており、割り当てられた一つの課題論文の要約と、論文に対して三つの独自の観点から考察をしていくことが要求されている。私は論文の要約と、最終日に行われるプレゼンテーション役を買って出た。

このコースでは、グループワーク以外にも、自由記述形式の最終試験があるため、グループで執筆する論文の分量はそれほど多くない。今朝は課題論文を読み返しながら、自分の担当である要約文を執筆していた。昼食前にそのドラフトが完成し、それをグループで共有しているGoogle Documentにアップしておいた。

今日はこれから、「実証的教育学」のコースで課せられている小さなグループ課題に取り組む。今回の課題はとりわけ興味深く、教育科学者のロバート・スレイヴンが行ったシステマティックレビューの調査結果をもとに、対象とする論文で取り上げられている教育的介入手法について評価をするというものだ。

スレイヴンは、システマティックレビューを実施することにより、教育的な介入手法が有益なものになるための八つの基準を発見した。その基準を活用しながら、ある論文で取り上げられている介入手法──私たちのグループは読解力に関する論文を選択──の有効性を評価していく、というのが今回の課題の趣旨である。

正直なところ、成人学習において、このようなシステマティックレビューをまだ見かけたことがない。というよりも、そうした観点はこれまでの私に欠落していたことに気づく。

企業組織に対して何か成長支援や学習支援をする際には、何かしらの介入手法を導入することがほとんどである。この時に、こうしたシステマティックレビュー、もしくはメタアナリシスがあれば、どれほど有益だろうか。例えば、「リーダーシップ能力の育成」というテーマを取り上げた時に、リーダーシップ能力を涵養する手法は世の中に無数にある。しかし、それらの質は玉石混淆だと言わざるをえない。その時に、それらの介入手法に関する俯瞰的なレビュー調査の結果があれば、介入手法の評価と選択に実に有益だと思うのだ。むしろ、そうした包括的な視点によってなされたレビュー結果を参照しないままに、何らかの介入手法を導入することは問題があるように思える。

その企業組織の特徴や対象人物の特徴を考慮せず、さらにはその介入手法の品質を見極めないままに何か施策を打っても、それは効果がないだろう。そうしたことから、成人学習や成人発達の介入手法に関するシステマティックレビューやメタアナリスが必要だ、という考えが湧いてくる。

今在籍している実証的教育学のプログラムは、本当にトレーニングが充実している。クラスの中では子供の教育についてディスカションをすることが多いが、一つ一つの内容は全て成人教育や成人学習にも当てはまる内容である。とりわけ、介入手法の品質評価を科学的に行う観点と方法を得られたことは極めて大きい。偶然ながら、来学期には、システマティックレビューに特化するコースとメタアナリスに特化するコースが必修となっているため、それらのコースの最終課題として、成人学習

© YOHEI KATO 2018

や成人教育の何からのテーマに絞り、実際にシステマティックレビューとメタアナリスを行いたいと思う。その調査結果は直接的に、自分の実務活動に結びついてくるだろう。2017/10/5(木)17:05

No.268: Graduation Ceremony at University of Groningen

I was honored to receive a master's degree from the University Groningen. I participated in a graduation ceremony to obtain a degree certificate in the afternoon. After leaving my house, I suddenly felt nameless dignity and gravity.

When I arrived at the main building of the university, a couple of people were waiting for their ceremony. I had not known that a graduation ceremony at this university was held for each individual graduate student.

The place for my ceremony was austere. My thesis supervisor gave me a heartfelt speech. Her speech made me remember kaleidoscopic memories of my life last year. After her speech, I received a certificate written in Latin.

The moment contained indescribable profundity derived from not only for receiving a certificate from this prestigious university but also for feeling what I have experienced and accumulated last year. My ceremony ended with dignity. When I went outside the building, the clear blue sky caught my eyes. I wanted to see it until I became the sky and until the sky became me. 17:34, Friday, 10/6/2017

1624. アーネムとユトレヒトに向けて

一つの夢が終わるのと同時に、今朝は五時前に一度目を覚ました。しかし、もう少しばかり睡眠が必要な気がしたため、そのままベッドの上で横になっていた。二度寝から目覚めると、朝の七時だった。普段はこの時間よりも前に起床しているため、辺りは闇に包まれているのだが、もうこの時間帯は闇ではなく、ダークブルーの空に変わっている。

道を走る車が、水しぶきを上げている音が聞こえる。昨夜はまた雨が強く降っていたのだろう。天気予報を確認すると、どうやら今日も雨のようだ。今日は午後から卒業式があるというのに。

よくよく考えてみると、秋の季節に行われる卒業式を経験するのは始めてのことだ。日本で卒業してきた学校は春に卒業式が行われていたし、米国の大学院を卒業した際は、初夏の六月に卒業式が行われていたように思う。また今回は、卒業式の後にも大学に残るという点においても、これまで自分が経験してきた卒業式とは少し様子が異なる。本日の卒業式は雨の中で行われることになるかもしれないが、それもまた一興だろう。

昨日は、来月にアーネムに訪れ、再来月にユトレヒトに訪れる計画を立てていた。アーネムはライン川に沿ったオランダ南部の都市である。この街には緑豊かな庭園や公園が多く、「庭園都市」や「公園都市」とも形容されている。この街に訪れることになったのは、研究関係のちょっとした所用のためであるが、アーネムの街について調べていると、なかなか魅力的な街だということに気づいた。特に、アーネムの中央駅から北に数キロほど上がったところにある、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園に足を運んでみたいと思った。

アーネムに訪れるのは来月の中旬ということもあり、もしかすると紅葉が綺麗かもしれない。また、この公園内にはクレラー・ミュラー美術館という美しい美術館がある。国立公園の中にたたずむこの美術館は、ヴァン・ゴッホの作品を数多く所蔵していることで有名とのことである。

今から二年半ほど前に、私はアムステルダムにあるゴッホ美術館を訪れた。それ以降、なぜだか時折、ゴッホの存在や彼の作品が気になることが度々あった。そして、この夏にオスロのムンク美術館に訪れた際に、再びゴッホの実物の作品を鑑賞したいという強い思いに駆られるようになった。

クレラー・ミュラー美術館は、ゴッホの作品に関して、アムステルダムのゴッホ美術館に次ぐほどの作品を所蔵しており、それらは「二大ゴッホ美術館」と呼ばれている。何気なくアーネムの街に行き、そのままフローニンゲンに帰ってこようと思っていたが、クレラー・ミュラー美術館を訪れ、アーネムの街でゆっくりと過ごしたいと思った。というのも、フローニンゲンからアーネムまでは電車で行くと、片道でおよそ二時間半かかるからである。

© YOHEI KATO 2018

また、アーネムの中央駅からクレラー・ミュラー美術館までは距離があり、バスを活用しなければならない。研究関係の所用が終わるのは午後の三時であるため、そこから美術館に向かってしまうと、ほぼ閉館時刻となってしまう。そうしたことから、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園のすぐ近くにあるホテルに一泊することにした。このホテルは、一歩外に出ると、すぐに国立公園の緑が広がる素晴らしい立地にある。日帰りではなく、クレラー・ミュラー美術館をゆっくり堪能するために、アーネムの街に一泊することになるとは思ってもみなかったが、今から心が躍る。

最後に、同じく研究関係の一環で、再来月の12月にはユトレヒトに訪れる。ユトレヒトはオランダを代表する都市であり、ユトレヒト大学は国内最大の大きさを誇る。昨年まで論文アドバイザーを務めてくださっていたサスキア・クネン教授は、ユトレヒト大学で教鞭をとっていたこともあり、ミーティングの中で何度かユトレヒトの街と大学について話をしてくれた。しかし、それ以外にはユトレヒトとの縁がなく、これまで一度も足を運んだことがなかった。今回は縁もあり、この街に初めて訪れることになる。ユトレヒトに訪問した際には、オルゴール博物館に是非とも足を運びたい。

やはり、この世界に存在する特定の場所というのは、しかるべき時にしかるべき理由で、自分とつながるのだということを改めて思う。アーネムにせよ、ユトレヒトにせよ、そして、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園内にあるらクレラー・ミュラー美術館にせよ、オルゴール博物館にせよ、全ての場所は、しかるべき時期にしかるべき理由で私の目の前に突然現れたのである。

私たちは人との縁のみならず、場所との縁の恩寵を絶えず受けながら日々を生きているような気がしてならない。2017/10/6（金）08:02

No.269: Encounters with Experience

When I woke up, I suddenly began to contemplate the profundity of experience that I will have for the rest of year in Europe. I will have various experience, and I will be the experience. Veritable experience is never possessed, and thus, it is bizarre to express “I have experience” or even “I experience something.” Authentic experience forces us to be it. This is compulsion derived from genuine experience.

I “encountered” experience in the early morning. It seemed that the experience was waiting for me to be it. I encountered or re-encountered the experience. Perhaps, our life is the process of recurrent encounters with experience. If our genuine experience is the subject, we always encounter ourselves everyday at every moment. 08:33, Saturday, 10/7/2017

1625. 卒業証書授与式

雨が降り、雨が止み。雨が降り、雨が止む。午前中からそのようなサイクルが繰り返されていた。時に激しい風が吹き、雨が真横に降り注いでいる姿や、風が落ち着き、雨が真下に向かって降り注ぐ姿を書斎の窓から午前中に何度も見た。

激しい風と穏やかな風。激しい雨と雨の降り注がない晴れの姿。午前中に見たそうした景色は、どこか昨年一年の自らの歩みを人知れず象徴しているように思えた。

午後一番に開催される卒業式に向けて、今日は早めに昼食を済ませた。天候の回復を祈っていると、出発の支度を整えた頃には雨が上がっていた。久しぶりにスーツを着用し、身なりを整え、私は大学のメインキャンパスに向かって歩き始めた。自宅を出発した一歩目の歩みから、どこか身が引き締まるような感覚があった。卒業式をもってして、また一つ新たな学位を取得するからだろうか。いや、それ以上に、これから始まる卒業式は、この一年間に自分が成してきたことの全てが凝縮されており、自らが積み上げてきたものを元に、再度ここから出発することに対して身が引き締まるような思いになっていたのだろう。

予定よりも早くメインキャンパスに到着すると、卒業式に参加する人たちが散見された。フローニンゲン大学の卒業式は、年に何回か開催され、それぞれの学生の卒業時期に合わせて、どこかのタイミングを選ぶことができる。もう一つ特徴的なのは、フローニンゲン大学の卒業式は、多くの学生が一堂に会するものではなく、個別になされることだ。15分刻みで一人の学生に対して、卒業証書の授与がなされるのである。

卒業証書の授与の場には、家族や親しい人を何名か呼ぶことが可能である。卒業証書の授与が行われるのは、私が在籍していた社会科学学科の式典用の部屋ではなく、法学科の式典用の部屋だった。会場付近でしばらく待っていると、式典用の部屋の扉が開き、正装をした一人の男性が

私を部屋に招き入れた。すると、私がスピーチを依頼していたサスキア・クネン先生が、大きなテーブルの真ん中を前にして立ち上がる姿が見えた。

とても厳かな雰囲気を醸し出す部屋に、太陽の光が差し込んでいた。クネン先生と最後に会ったのは、夏季休暇の前であるから、今からもう三ヶ月以上前のことだ。その間にも、何度もメールでやり取りをしていたが、こうした場で久しぶりに顔を合わせることができて、とても光栄な気持ちになった。大きなテーブルを挟んで、テーブルの向こう側にクネン先生と私を部屋に招き入れてくれた男性が着席した。

着席した私の目の前にあったのは、卒業証書を置くための下敷きとサインのためのペンだった。クネン先生から、この式の進行についての話があり、その後、先生のスピーチが始まった。先生のスピーチの中には、私のこの一年間の歩みの全てが含まれているように思えた。クネン先生の支援を受けながら、共に研究をしてきた一年間の記憶が走馬灯のように流れた。だが、その場に流れる時間は止まっているかのようだった。式典会場に降り注ぐ太陽の光がとても暖かく感じた。

クネン先生のスピーチが終わり、私は先生から、ラテン語で書かれた卒業証書を授かった。その証書を受け取り、サインをした。何か非常に重たいものを授かったように思えた。それは、この大学における学位を取得したことの重さというよりも、自分が積み重ねてきたことの重さだった。

一人の小さな人間が、その人の日々を捧げ、何かに打ち込む過程の中で築き上げてきたものの重み。そして、その価値と尊さ。私が欧州での生活を通じて学んだ最も大切なことは、これなのではないかと思う。欧州で訪れたいかなる場所にも、この重厚な感覚があった。

一人の人間、あるいは人間たちが人知れず積み重ねていったものが持つ固有の重み。それは人の命と同様に、目には見えない重みを持つのだ。その重みに気づかせてくれたのが、欧州での一年間の生活であり、フローニンゲン大学での一年間の学術生活だった。

ラテン語の卒業証書にサインをし、もう一度クネン先生にそれを手渡した。その後、卒業証書の翻訳として、オランダ語と英語の卒業証書が同封された包みを授けられた。式が無事に終わり、クネン先生と私は笑顔で握手を交わした。そして、私は式典会場の部屋を後にした。

© YOHEI KATO 2018

メインキャンパスの外に出ると、午前中の雨が嘘のように、晴れ渡った空が目の前に広がっていた。私はこの空をしばらく眺めていようと思った。自分が空になるまで、空が自分になるまでその空を眺めていたかった。2017/10/6(金)16:58

No.270: Self-Fermentation

Time never passes within me during my life in Europe. Experience accumulates inside myself. It is true that my knowledge system has become larger for the past year. However, an important point is that the self, which strives to acquire and digest knowledge, transforms. Moreover, I can feel that not only the self toward knowledge transforms but also the self to create knowledge emerges. I needed the past several years in Japan and four years in the US. I needed self-fermentation to come here. 08:56, Saturday, 10/7/2017

1626. 経験の発酵と醸成

昨日と同様に、今朝は遅めの起床となった。七時に目を覚ました時、突如として、オランダで過ごす残りの一年間に経験することの重さを知った。残りの一年間の中で、自分は多様な経験を積み、それらの一つ一つが大きな総体の一部になっていくだろう。そんな確かな予感があった。

これは不思議な予感だった。人が発達や学びを深めていく際に、経験というものについて考えることを避けることはできない。

欧州での日々が積み重なっていくことに応じて、経験の持つ意味が少しずつ変容していき、経験そのものの質も変容していった。起床直後の私の脳裏には、「経験に勝るものはない」という考えがよぎっていた。単なる行動でも体験でもなく、それらが自己の深層にまで降りていき、そこで発酵された後に姿を見せる経験というものに、私はもう一度出会ったかのようだった。起床直後のあの不思議な感覚は、経験との出会い、もしくは再会と名付けていいかもしれない。

欧州での日々においては、私の内側に時間が流れていくのではない。私の内側に経験が堆積されていくのである。過去の経験が純化され、新たな経験が醸成されていく。そんなことを思わずにはいられない。

昨日もまた、日々を積み重ね、経験を醸成させていくことの価値と尊さを体験していたことを改めて思い出す。昨日は、卒業証書授与式があった。式の中で私は、ラテン語、オランダ語、英語の卒業証書のみならず、学位取得のために履修してきた各コースの成績書も手渡された。式が終わり、自宅に戻ってから、改めて卒業証書と成績書を眺めていた。

この一年間、この大学で何を学び、大学の外で何を学んでいたのかを回想していた。随分と多くの経験を積み重ねてきたような実感があった。確かに、大学を通じた探究活動の中で数多くの知識を獲得するための修練を積み重ねてきたが、それよりも、知識を獲得しようとする自己そのもの、あるいは、知識を咀嚼する自己そのものが変容したと実感できることが、何よりも意味のあることだと思う。

欧州での生活を通じて、知識と向き合う自己が変容し、知識を創造する自己の芽が生まれたことを実感している。日本で過ごしたこれまでの歳月と、米国での四年間を経て欧州に来たことの意味が、徐々に自分の中で明瞭になりつつある。

私は欧州に来る必要があったのだと思う。仮に日本で人生の全てを過ごしていたら気付けなかったこと、経験できなかったことがどれほど大きなものであるかを知る。また、仮に米国で引き続き生活をしていたら気付けなかったこと、経験できなかったことがどれほど大きなものであるかを知る。偽りや誇張なく述べると、やはりこの世界の特定の場所には、そこでしか喚起されえぬ感覚と経験がある。

その背後にあるのがまさに、その場所で生活をしてきた無数の人々たちが積み重ねてきたものなのだと思う。それを人は文化と呼ぶのかもしれない。文化というのは、個人の経験の発酵と積み重ねが、他者の経験と出会った末に生まれる集合的経験と形容することができるかもしれない。

フローニンゲンの秋の土曜日のとある朝。静かな風と共に雨が天から降り注ぐ。

欧州で過ごすこれからの一年間に少しばかり希望を見出している。この一年間が終われば、再びまた新たな場所で日々を形づくっていきたいと思う。米国に戻り、そこで長い時間を過ごした後、再び欧州の地に戻ってきたいと思う。その先の先に、日本が必ずあるはずだ。そう信じたいと思う。
2017/10/7（土）08:12

© YOHEI KATO 2018

No.271: Indescribable Doubt of Scientific Work

I obtained a diploma for my second master's degree last Friday. I am honored to receive it from one of the most prestigious research universities in the Netherlands. I want to continue to devote myself to scientific work. However, indescribable doubt of science showed up within me last night.

I said to myself in mind: "I believe philosophy and music more than science. Scientific work has significant meanings, but it gives me a somewhat desolate feeling."

The diploma proves that I can conduct scientific research and write a scientific article by myself. I am willing to do it because one of my vocations is scientific work. Yet, what was the bleak feeling last night? Probably, it prevents me from devoting myself to scientific work from my heart. In fact, I still cannot start continuous writings for academic articles. I am waiting for something with this desolate feeling, but I know that my volition is ahead of the unutterable doubt of science.

It can be a safety valve and a necessary ordeal. Once I detect the true nature of the feeling and transform it, I will truly devote myself to scientific work and begin ceaseless scientific writings.
07:30, Sunday, 10/8/2017

1627. ヘリコプターと翼

早朝の気分がどうしてもドビュッシーの曲に合わず、ベートーヴェンのピアノソナタを聴くことにした。今から10時間ほど、マウリツィオ・ポリーニの演奏するピアノ曲を聴くことになる。

朝食を摂りながら、曲に耳を傾けていると、改めてクラシック音楽の持つ不思議な力に気づかされた。これは音楽に限らず、古典と呼ばれるもの全般に当てはまる特質かもしれない。長い年月をかけて蓄積と純化を経た末に生み出されたものだけが持ちうる力。古典と呼ばれるものには、そうした力が秘められており、クラシック音楽にもそのような力を感じることができる。

起床してからすでに二時間ほどの時間が経ったが、昨夜の夢の内容がまだ残っている。私は普段、夢の印象が鮮明なうちにそれを書き留めておくことにしているが、今日はそれをしなかった。あえて

夢の印象を熟成させ、濾し取られた部分だけを抽出して書き留めておこうという意図が働いていた。

夢の中で私は、河川敷のグラウンドで行われるサッカーの試合に参加する予定になっていた。その会場は隣町にあり、そこに行くためには、大きな河川を渡っていかなければならない。試合会場に行くために私は、一人用の小型ヘリコプターのようなものに乗った。この奇妙な乗り物についてもう少し説明すると、操縦席のようなものはなく、足場もない。あるのはブランコのような椅子とプロペラと、手元に操縦用のハンドルがあるだけである。

その乗り物に乗ると、一気に高度10,000mの高さまで上昇した。そこからの眺めは確かに見晴らしの良いものだった。しかし、自分の足が宙ぶらりんの状態であり、自分の身ひとつが空に浮かんでいるのとほぼ変わらない状況であったため、少しばかり恐怖心を抱いていたのは確かである。

高度10,000mの高さから地上を見下ろすと、すぐに試合会場を見つけることができた。そこから私は、手元のハンドルを操作しながら、目的地に向かってゆっくりと降りていこうとした。その時に、プロペラが奇妙な旋回を始め、その動きに合わせて私の体もゆっくりと旋回を始めた。その間にも、地上の目的地を絶えず見定めながらハンドル操作をしていたのだが、私は目が回ってしまった。

どうやらその動きに酔ってしまったようなのだ。機体の旋回と自分の体の旋回に耐えられなくなり、私は目を閉じた。目を開けると、試合会場のある河川敷の上にいた。すると、後ろから私の知人が声をかけてきた。

知人:「すごい登場の仕方だったね。まさかヘリコプターを使って来るとは思わなかったよ」

私:「いや～、無事に着けてよかったよ」

知人:「無事？そうだね。それはそうと、地上を歩いてくれば数十分で到着できたのに、なんであんなに時間をかけてヘリコプターで来たの？」

どうやら私が住んでいる町からその会場には、陸路を歩けば数十分で到着できたらしい。なぜ私は、あんなにも空高くに上昇し、そこから目眩に見舞われながらヘリコプターでその場所にやってきた

のだろうか。それは自分にもわからなかった。その点はとても気がかりなことではあったが、それ以上深く考えることもなく、試合に向けて準備をすることにした。そこで夢の場面が変わった。

夢の場面が変わると、私は大きなコンサートホールにいた。そのホールの観客席は平坦ではなく、段差のある作りになっていた。このコンサートホールの大きさは驚くほど大きく、観客席の一番上から一番下の席の人の顔を眺めると、その人の顔がわからないぐらいの段差になっていた。

不思議なことに、そこではコンサートが行われていたのではなく、私が音楽に関するテーマで講演をすることになっていた。しかもそれは、このコンサートホールにいる全員に向けてではなく、一部の客席の人に向けてのものだった。

私の講義がまさに終わろうとしている時、突然ある列に座っていた観客の全員が立ち上がり、笑顔で上の観客席の方に向かっていった。私は特に彼らを止めることなく、しばらく様子を見ることにした。上の観客席に到着した彼らは、突然、『翼をください』を歌い始めた。私は講義の最後に、各列の人たちに、別々にその曲のパートを歌ってもらおうと考えていた。そのため、彼らが突然に私が計画していた曲を歌い始めたことに、嬉しい意味で驚かされた。

一方で、全員で分担してその曲を歌おうと思っていたのに、彼らが最初から最後まで歌おうとしていることにはあまり良い感情を持たなかった。なぜなら、この曲はその場にいる全員で歌うことに意味があると考えていたからだ。彼らが歌い始めると、いつの間にやら、このコンサートホールは観客で一杯になった。そして、ここにいる観客一同が、一斉に『翼をください』を歌い始めた。最初は全員が少し遠慮がちに声を出していたが、徐々に自分の声を腹から出すようになった。

観客席の真ん中あたりに、マイクを使って、全員の歌を正しく導いていこうとする男性がいた。その男性の歌声が、その場にいた全員の声を一つにしていった。そして、いよいよサビの箇所に差し掛かった時、「この大空に翼を広げ」と歌うべき箇所を、その男性は「この大空に『トゥばさ』を広げ」とマイクで大きく歌い上げた。その瞬間、会場の人たちから、「『トゥばさ』って何だ？翼じゃないのか」というざわめきが起こった。そのざわめきは収束することなく、私はそこで夢から覚めた。2017/10/7（土）09:55

No.272: Intellectual Euphoria in Paper Review

I do not remember when the last time it is sunny. The weather is fine today. Today is emitting a somewhat peaceful atmosphere. I just finished reviewing a collaborative paper for a course requirement.

I casted some doubt on scientific research in the early morning, but I was with moderate rapture when I was reviewing the paper. Filling out logical leaps by supplementary logic and reconstructing argumentation gave me intellectual euphoria. Another review on a different paper is waiting for me; I will tackle it in the evening. 16:41, Sunday, 10/8/2017

1628. 科学への疑義

昨日はほぼ終日、学術研究と日本企業との協働プロジェクトに関する仕事を進めていた。昨日の目覚めは午前七時といつもより遅く、気づけば就寝前の作曲実践に従事することなく睡眠を迎えた。

今日も昨日からの続きとして、いくつかのレポートをまとめ、協働プロジェクトに関する資料を完成させたい。今日は日曜日であるから、作曲実践を就寝前だけではなく、午後の時間帯やできれば午前中にも行いたいと思う。

現在、履修している二つのコースで論文を執筆している最中だ。ふと思ったが、コースで要求される最終論文を元にして、査読付き論文を執筆できるのではないかと思った。毎回のコースでは、オランダの研究大学院に固有の、厳格な基準に則った科学論文の提出が求められるが、せっかく論文を執筆するのであるから、それを担当教授だけに提出するのではなく、科学論文として広く共有することに意義があると思った。

先日授かった二つ目の修士号の卒業証書の補足資料の中に、「科学研究の最初から最後までのプロセスを一貫して担えることを証明する」という文言があった。今となっては昔のことだが、日本の学士過程にいた時は、自分が修士課程に進むということなど考えてもいなかった。だが、気がつけば、今の私は欧米で取得する三つ目の修士課程にいる。卒業証書の補足資料が述べるように、す

でに独力で研究を遂行し、論文を執筆することの許可は得られている。あとは自分が筆を取るだけなのだ。

昨夜も少しばかり、科学について疑いの目を向けていた。科学研究や科学論文を執筆することへの疑いの目である。この問題については、すでに以前に解決できていたと思っていたが、どうもそうではなかった。やはり、自分の内側に、まだ完全に科学研究に従事できないわだかまりのようなものが残っている。それを見過ごすことはできず、この問題を解決しなければ、自分が科学論文を絶えず書いていくことに従事することはできない。

昨夜の就寝前の私は、「科学よりも哲学と音楽を信じる」ということを頭の中でつぶやいていた。「科学研究に意味がないわけではない。むしろ逆に大きな意味がある。だが、どこか寂しい」という言葉が頭の中に響き渡った。

科学研究に対して私は大きな意義を感じている。そして、科学研究を進めていく過程の中で、私は没頭感と充実感を感じる。しかし、科学研究が持つ寂しさをどこか感じている自分がいるのは確かなのだ。その寂しさの正体が一体何なのか。それを突き止め、なおも科学研究に向かわせるものが自分の中にあるかどうか。おそらくそれが、今後の科学者としての自分の在り方と仕事を決定づけるだろう。

科学研究に対する寂しさの感情は、すぐに変容するものではないだろう。おそらく、しばらくの時間が必要であり、それは長い時間を要することかもしれない。今できるのは、寂しさの感情を抱えながら、自らの探究項目の科学研究を進めていくことである。科学研究に対する寂しさの感情は、確かに研究への専心の足かせになるものである。だが、それがあっても科学研究を行おうとする自分の意志があるのはまぎれもない事実だ。

おそらく、寂しさの感情の向こう側には、科学研究を真に信じる自分が存在しており、すでにその意志が顕在化し始めている。あとは、この何とも言えない寂しさの感情の正体を突き止め、それを変容させていくことが必要になるだろう。2017/10/8（日）07:09

【追記】

上記の日記を書いてから一年以上の月日が経った。その間に私は、欧米の大学院で取得する三つ目の修士号を得た。あえて日本的な区別をすれば、文系の修士号を一つ、理系の修士号を二つ取得した。今改めて思うのは、科学の重要性を十分に理解しながらも、自分は科学の世界に完全に身を置くことはできないということである。

上述の日記にあるように、科学以上に哲学と音楽(ないしは芸術)に価値と意義を見出している自分がいる。これからも科学と付き合っていくことになるだろうが、科学的な仕事に従事することよりも大切なことが自分の人生にはあるようだ。フローニンゲン:2018/12/26(水)13:56

No.273: Task Allocation

Before going to bed last night, I was ruminating on the tasks to do. Comparing with the first program last year, I feel that the second program this year has more tasks probably because I am juggling academic work and professional work simultaneously.

I have a group presentation next week. The initial plan is that I will make PPT slides and make a presentation, but it will be wise to allocate tasks because the other members are more conversant with the topics they wrote in our paper. I have to keep in mind again that task allocation is crucial for collaborative work. I will try not to take on all tasks by myself. 07:46, Monday, 10/9/2017

1629. 共同論文の執筆に向けて

先ほどは、自分が抱く科学への疑義について書き留めていた。結局、そうした疑義の正体を突き止めないまま、これから私は科学論文を書く。現在履修している「学習理論と教授法」で課せられている論文を執筆していく。

昨日、四人で共同して執筆しているこの論文のレビューを行った。残りの三人はオランダ人であり、彼女たちが書いた論文の質は高く、オランダの学部教育の質の高さを物語っている。論文の書き方にせよ、科学的な論説の進め方の作法を高い次元で教育されていることを、彼女たちの文章は物語っていた。

共同論文のドラフトを最初から最後までレビューを行い、編集することを昨夜行いたかったのだが、なかなか時間の要する作業であることに気づき、実際にそれを全て完了させることができなかった。今日の午前中は、この編集作業に取り組むことを優先させたい。

先日の卒業証書の授与式で、これまで論文アドバイザーを務めてくれたサスキア・クネン教授と久しぶりに会ったことを、数日前に書き留めていたように思う。改めて、昨年クネン先生と共同で執筆した修士論文をもとに、査読付き論文を執筆したいと思う。私が昨年執筆した修士論文はかなり分量が多く、そのままでは査読付き論文として提出することはできない。

項目の性質を考えると、おそらく二つに分けることができる。それぞれの内容に対して、一つずつ査読付き論文を執筆することができれば理想だ。正直なところ、この案は半年以上も前から考えていたことだったように思う。三つ目の修士課程が始まり、日本企業との協働プロジェクトに従事していると、その案が眠ったままになってしまっていた。

卒業証書授与式の最後に、クネン先生は、私が博士課程に進学する際はスーパーバイザーをまた務めてくださるという有り難い言葉をかけてくれた。博士課程の進学先がフローニンゲン大学であろうと、米国の大学であろうと関係なく、研究テーマの内容によって、ぜひまた先生にスーパーバイザーをお願いしたいと思う。

昨年一年間の先生との協働をやはり何か形にしたいと思う。まだ審査の結果が降りていないが、昨年の研究をもとに、来年の国際ジャン・ピアジェ学会で発表を行う応募を済ませた。審査が通れば、学会での発表という形で研究成果を他の研究者に共有することができる。これも一つの形だろう。

一方で、やはり論文という形にまとめ、それをより多くの科学者に共有したいという思いがある。一年間のプログラムの中で、今学期が最も履修するコースが多く、なおかつそれらの一つ一つの要求水準が高いため、今学期が落ち着く11月の初旬をめどに、またクネン先生の研究室のドアを叩きたいと思う。そこでもう一度、昨年の研究論文をどのように査読付き論文にしていくのかを先生と話し合いたい。

卒業証書の中に、科学研究の最初から最後までを一貫して独力で行い、論文の執筆についても独力で成しうる旨の記載があったが、私はまだまだ他の研究者の支援が必要である。それは自身

の最適レベルの発揮のみならず、科学的な知見というものが、本質的には科学者たちの協働の産物であることを踏まえてみれば、他の研究者の支援を生涯得ながら自分は研究を進めていくのだと思う。2017/10/8(日)08:03

No.274: Research Ideas

Through the lecture today, I was thinking about the importance of focusing on not only outcomes but also processes of learning. For instance, we can measure the level of reading comprehension by investigating a product (e.g., conceptual network). However, investigation into the constructing process of the end product is crucial especially when we implement interventions.

I came up with some research ideas for my thesis. My current research topic is MOOCs, in particular the relationship between contents complexity and learning outcomes. I plan to apply dynamic systems perspectives and time-series analysis. To quantify the complexity of contents, it would be feasible to utilize a basic technique of network science.

I will make conceptual networks to investigate the complexity of argumentation, so I can use an elementary technique of network science to analyze the conceptual networks in a unique way. I hope that I will have enough time-series data to apply a nonlinear dynamics technique to the quantified data. 11:32, Monday, 10/9/2017

1630. 論文レビューが引き起こす恍惚感

今日は久しぶりに晴れ間が広がった。どこか平和な雰囲気が漂う日曜日である。

午前中より、「学習理論と教授法」のクラスで課せられている共同論文のレビューを行い、午後の早い段階にそれが完了した。メンバーにレビューの完了を報告し、再度意見を求めた。

レビューをしながら改めて思ったが、やはり科学論文を執筆するプロセスそのものの中に、特殊な充実感を引き起こすものが潜んでいる。今朝の起床直後は、科学論文の意義を認めながらも、科学研究についての疑義を投げかけていた。もちろん、この疑義が完全に晴れ渡っているような状態

ではないが、先ほどのレビューの過程の中で、文章を修正し、新たな文章として再構築させていくプロセスの中に、芯から湧き上がる喜びを見出していた。

レビューをする中で、メンバーの論拠を補うために、自分で他の論文を探す試みを行っていた。その中で、オンラインコラボレーションラーニングに関する興味深い論文をいくつか発見した。そうした論文を読むにつけて、それらの複数の発見事項をいったん自分でまとめ上げるような研究をしたいと思った。これは先日言及していたように、既存の論文に対するシステマティックレビューやメタアナリシスの方法を採用することになるだろう。

ちょうど来学期に、それら二つの研究アプローチを習得するための二つのコースを履修することになっている。少し気が早いが、今からそのコースの最終課題で取り上げるトピックについて考えを巡らせていた。大きなテーマとしては、リーダーシップ能力の開発、リフレクション能力の開発、メタ認知能力の開発、MOOCの学習効果のうち、二つを取り上げたい。取り上げた項目の研究目的とテーマをより明確にし、それら二つのトピックについてシステマティックレビューとメタアナリシスを実行する。

「学習理論と教授法」のコースを担当している、ダニー・コストンス教授は、クラスの中でそれらの二つの研究アプローチについて言及をした際に、それら二つの研究アプローチがいかに手間暇のかかるものかを強調していた。確かに、数百から数千の論文を対象に、そこから明確な基準によって論文を振るい分け、数百ほどの論文に目を通して、包括的な研究結果を提出することは、労力が必要となるだろう。

しかし、これら二つの研究アプローチのプロセスと方法を一度でも体験しておくことは、自分の今後の研究者としての仕事に非常に有益であろうと思う。また、仮に今後私が論文ではなく、何らかの書籍を執筆する際にも、システマティックレビューやメタアナリシスのアプローチは、より意味のある情報を共有する上でとても有意義な方法だと考えている。

来学期においても今学期と同様に、コースで取り上げられる専門書と論文に焦点を当て、学習項目をより深く身につけていくことを意識したい。2017/10/8（日）16:27

No.275: Systems Science and Network Science

I want to devote myself to at least two domains of expertise as a scientist: (1) systems science and (2) network science. The former includes time-series analysis, nonlinear dynamics, dynamics systems approach, etc. I have explored diverse topics so far, for instance, adult cognitive development, adult online learning, child development, and so on.

I realized that I could have conducted more rigorous research on those topics if I had knowledge and skills on systems and network science. My research theme is human development and learning, and it will never change.

I believe that systems and network science can reveal the undiscovered aspects of human development and learning. I decided to invest my time and energy to these scientific fields in a thorough way. I may obtain a PhD for either field or both. 11:43, Monday, 10/9/2017

1631. 後ろ髪を引くもの

数分前に、論文レビューが引き起こす何とも言えない恍惚感について言及した。そして、今朝は科学研究に対する疑義を投げかけている自分がいた。両者を経た後に改めて、科学論文を執筆することが引き起こす形容しがたい寂しさについて考えていた。ぬるりと背中に張り付くような、一抹の寂しさが科学論文の執筆の中にある。その寂しさの正体が何なのかをもう一度探っていた。その正体の一端は、実は昨夜の段階で見えていた。

昨夜、仮に人間の発達というテーマに絞ってみた時に、人や組織の発達に関心を持ち、そしてそれらの実践に取り組む組織人の中に、一体どれほどの人が学術論文を読みこなせるのだろうか、という疑問を抱いていた。少なくとも自分が組織人であった時、学術論文など一度も読んだことがなかったのではないかと思う。また、人間の発達に関心を持ってからもしばらくは、学術論文というよりもむしろ、研究者や専門家が一般向けに発達理論を解説した書籍などに目を通していたように思う。

だが、これは後々に自分が発達研究に本格的に従事し始めてから気づいたが、一般向けに執筆された書籍というのは、人間発達の研究の成果のうちの氷山の一角を紹介したものに過ぎない。一般の書籍を通じて、人間発達に関する知見を獲得することには大きな限界があるのだ。また、氷山の一角とはいえ、数百ほどに及ぶ発達理論の優れた書籍のうち、数冊程度しか日本で翻訳出版されていないことは、かなり嘆かわしい状況だと言える。これは人間発達に関する研究領域だけに限ったことではないだろうが、やはり組織人が学術的な研究成果の恩恵を享受するためにはいくつかのハードルがあるようだ。

これは訓練をしていないのであるから当然と言えば当然だが、端的に述べると、学術論文を読みこなせる組織人の人口割合は極めて小さい。特に、人間発達に関して言えば、それらの知見が英語空間で生み出されているものであるため、英語の論文を読みこなせる組織人というのは、ほんの一人握りだろう。

日本語の翻訳書と英語の専門書の間には、情報量の圧倒的な開きがあるが、実は英語の専門書と論文との間には、それに匹敵するだけの情報量の圧倒的な差が存在する。日本の発達理論を取り巻く現状、そして組織人の学術論文を読みこなすリテラシーの力量を考えた時に、自分が学術論文を執筆することの意義を問いただされたのである。

自分の内側には、英語で学術論文を絶えず書き続けたいという強い思いと同時に、日本の発達理論を取り巻く現状に何らかの寄与をしたいという思いがある。今は、これらの思いが対立している状態にある。それがどこか、論文執筆をする際の寂しさにつながり、それは論文を書こうとする際に私の後ろ髪を引いている。2017/10/8（日）17:04

【追記】

上記の主題は、ある結論を持って今は落ち着いている。科学論文を執筆していくことに対して現在の私の関心はなく、科学に対する上記の疑義は、ある種弁証法的に哲学と音楽の探究に向かう形で解消されていった。一年ほど前の私は、論文を書くことに疑いの目を持っており、実際に大量に論文を創出していくことに乗り出していかなかった。今はその代わりとなる表現手段と創造手段を得て、これからの人生は日々それに従事していこうと考えている。フローニンゲン：2018/12/26（水）14:12

No.276: Four Types of Validity

One of the today's lectures refreshed my memories about statistics. To put it more precisely, I could solidify my knowledge of four types of validity: (1) internal validity, (2) statistical conclusion validity, (3) external validity, and (4) construct validity. I had a vague memory about each definition. The lecture enabled me to bolster my knowledge not only of the definitions but also of some threats to each validity.

Because the topic of validity threats was quite intriguing to me, I will address each of them, relating with research on human development and learning. 18:40, Monday, 10/9/2017

1632. 課題の整理

昨夜も就寝前についつい考え事をしてしまっていた。現在、フローニンゲン大学での二年目のプログラムは順調に進んでいるのだが、目の前に差し迫っている課題の量が昨年のこの時期よりも多いのは確かだ。

昨夜無事に、「学習理論と教授法」のコースで要求されている共同論文のドラフトを担当教授に送った。来週はこの論文に関するプレゼンがある。当初、グループメンバーには、私がプレゼン資料を作り、自分がプレゼンを担当することを伝えていた。しかし、昨日のレビューの際に、論文の担当箇所ごとに執筆者それぞれにプレゼンスライドを作ってもらった方が効率的であり、なおかつ内容も充実しているだろうと考えた。さらに、論文の後半箇所を私がプレゼンするよりも、後半部分を一番詳しく知っているメンバーにプレゼンを任せた方が良さそうだと思った。ちょうど今日の午前中にクラスがあり、メンバーと会うであろうから、その旨を伝えたい。

とにかく、一人で仕事を抱えるのではなく、分担できることは分担した方がいい。でなければ、現在抱えている複数の課題に首を絞められることになってしまうだろう。

プレゼン資料作成の分担ができれば、明日にでも自分たちの論文の概要と自分が執筆した箇所のプレゼンスライドを作っておこうと思う。ここで一旦、その他の課題についても整理をしておいた方が良さそうだ。

今日の午後に「評価研究の理論と手法」のクラスがあり、それに引き続いてコンピューターラボがある。先週初回のコンピューターラボに参加したが、その場でその週の課題に取り組み、質問があればその都度講師に行うような形式で実習が進んで行く。先週は、二時間の実習の中で、分析からレポートの作成まで終わることはなく、結局課題を持ち帰ることになったため、今週もそのような形になるだろう。

この課題では、与えられたケースを読み、必要な統計手法を選択し、分析結果をレポートにまとめていくことが要求されている。厳密には、単なるデータ分析ではなく、その日のクラスで取り上げられた、実証的教育学の概念について説明させる問いも含まれており、定量的かつ定性的な課題となっている。

今日のクラスで取り上げられるトピックは、信頼性と妥当性であり、特に後者を中心に取り扱うことになっている。そのため、妥当性に関する分析をコンピュターラボで行うことは一つ予想される。実習の際にできるだけ課題を終わらせ、持ち帰る量を極力減らしておきたいと思う。

今回の課題は基本的に一人で取り組んでいるが、先日知り合いになった、オランダ人のハーメンと意見交換をすることがとても有意義であり、彼の統計知識に助けられることも多々あり、今回もまた週末あたりに意見交換をすることにしたい。

もう一つ、今週末は、「実証的教育学」のコースで要求されている最終論文の執筆を進めておきたい。以前に数章分のドラフトを執筆していたが、それっきりとなっている。こちらの論文は一人で執筆することができるため、ここからは一気に執筆を進めていきたいと思う。今週末の丸二日間を使えば、論文のほとんどの箇所が完成するのではないかと思う。11月の初旬までは、課題と最終試験に向けた学習に専念したいと思う。2017/10/9（月）07:34

No.277: Never Too Late to Begin

Perhaps, I am oscillating between my doubt and belief on science, but I realized today that I could not resit my zest for scientific work. My inner voice at the deepest location of my spirit whispers to me that I can trust and follow my path to live my entire life as a scientist.

No matter how much time it takes, I will finish a PhD program in my near future. Is it too late to begin an academic career after I am 40 years old to finish my third master's program and to obtain two doctoral degrees? I would like to follow the fundamental principle of human development and learning: "Slower is better." This is what Jean-Jacques Rousseau said, which encapsulates the universal truth of human development and learning. 20:18, Monday, 10/9/2017

1633. 仮想通貨に関する夢

昨夜、ストーリーとしての記憶は鮮明でないが、一つ印象的なシーンを持った夢を見た。

夢の中で私は、自分が投資している仮想通貨の値動きをPCのスクリーン越しに眺めていた。その仮想通貨を購入した時期は随分と前であり、その当時はほとんど注目をされていない通貨だった。正直なところ、この通貨を購入し、それを保有していることすら忘れていたのだが、何かのきっかけで思い出し、値動きの様子を確認しておこうと思った。

すると、自分が投資をした頃に比べて、100倍の値が付いていた。しかも、その仮想通貨の価格が突如として上がったのは、ごく最近のようだった。その日付の近辺のニュースを確認すると、どうやら勢いのある日本のベンチャー企業がこの通貨を買い占めようとしたようだ。

普段ニュースを見ることもなく、そのベンチャー企業についてもその時に初めて知ったため、その会社の投資戦略の背景など分かるはずもなかった。ただスクリーンの前に、自分が購入した時の金額の100倍の値がついた数字が表示され、その瞬間にも刻々と価格が上下動していた。その上下動の様子は、どこか生物の動きのようだった。購入した時よりも100倍高い価格がついたことを確認した時、その場でその通貨を全て売り払うか迷った。

しかし、よくよくこの通貨の購入時を思い出してみると、1000倍になった時に売りに出そうという明確な意図を、当時の自分は持っていたことを思い出した。スクリーンには具体的な数字が表示されており、現在私が保持している仮想通貨の総額は6千万円だった。それが6億円になるまで待つのかどうかを静かに考えていた。結局、その場で売りに出すことをせず、当初の予定の1000倍にまで価格が上がるまで待つことにした。そこで夢から覚めた。

フローニンゲンの今朝の気温は寒く、空は曇っている。今日はどうやら、これから雨になるらしい。今日は一日中大学のキャンパスで過ごすことになる。それにしても、昨夜の夢は何を暗示しているのだろうか。

夢の中で出てきた仮想通貨は、実際に私が保持しているものである。ノルウェーを訪れ、エドヴァルド・グリーグという作曲家に個人的な思い入れが生まれたのと同様に、数年前にある仮想通貨に個人的な思い入れが生まれた。その仮想通貨を応援する意味を込めて、当時まだほとんど注目されていなかったその通貨をある程度のまとまりを持って購入していた。夢の中と同様に、この通貨の応援をやめ、自分がそれを売りに出すときは、1000倍に値が上がった時だと当初から考えていた。

ただし、夢の中で起こっていたように、仮に100倍に値が上がったら、自分はどうするだろうか、ということを考えていた。それは何か厳しい選択のように思えた。通貨を購入した時は、日々の値動きを知らせる通知をメールに送ってもらうように設定していたが、随分前にその通知を受け取る設定を解除した。今朝、久しぶりにその仮想通貨の価格を確認したら、8倍に値が上がっていた。だが、その値段に何も感じることなく、通貨の値動きを示す画面を閉じ、大学に向かう準備を始めることにした。2017/10/9（月）08:30

【追記】

異国の地で生活をしながらも、日々日本の仮想通貨を取り巻く状況を眺めている。最近、金融庁かどこかの組織が率先して、「仮想通貨」ではなく、「暗号資産（crypto assets）」という言葉を今後用いていくことを推進していく旨の発表をした、というニュースを見た。正直なところ、銀行残高というのもそもそもそれはバーチャルな数字でしかないのであるから、仮想通貨だと呼べるだろうし、電子マネーや各種ポイントも仮想通貨として以前から機能し続けていた。そうしたことを考えると、既存の仮想通貨と区別する形で、ブロックチェーンといった暗号技術を活用した新たな通貨の名称を「暗号資産」と呼ぶように改めたのは納得がいく。だが、基本的には──ないし究極的には──、いかなる通貨も仮にそれが紙幣や硬貨という物理的な物質を伴っていたとしても、バーチャルなものに違いはない。

先日、かかりつけのオランダ人の美容師に、店に暗号資産を導入してみてはどうかと話を持ちかけた。オランダ人の多くは、多くの日本人と同様に、暗号資産の実際の活用に対していくぶん懐疑的

なのだが、それでも少しずつオランダでも認知が広まっているようだ。実際に、アーネムという街には、暗号資産で支払いできるレストランや店が集まっている地区がある。また、アムステルダムにも暗号資産の使える店が少しずつ増えてるようだ。2019年に暗号資産を取り巻く状況が世界的にどのように変化していくのかを観察していこうと思う。フローニンゲン：2018/12/26（水）14:12

No.278: Learning by Researching

I got up before six o'clock and started today's work at six. As I felt yesterday, I am still feeling that something within me is kindling silently but vigorously.

I want to add new expertise of systems science and network science to my current expertise, developmental science. Since I do not have enough space to explore the two scientific domains in this semester on weekdays, I plan to do it on weekends.

I will slowly but steadfastly construct knowledge and skill of those domains. The devotion to the exploration of truth, goodness, and beauty is indispensable in my life. Science, philosophy, and music will be always beside me.

I need to investigate network science in more detail because I am not so acquainted with the subdomains of the field. On the other hand, I will keep cultivating my expertise on systems science, in particular, dynamic systems approach, nonlinear dynamics, and time-series data analysis.

As I learned systems science meaningfully through applying knowledge and skills to my actual research last year, I plan to utilize frameworks of network science for my research this year. "Learning by doing" is a universal principle for learning. In my case, "learning by researching" would be a better phrase.

My learning process of music composition has illuminated the essence of how to learn something. As well as music composition, I will gradually build my expertise of those scientific domains, applying the frameworks to my actual research. 06:56, Tuesday, 10/10/2017

1634. 無能さと無知の果て

今日はとても充実した一日だった。このようにして日記を書く時間が全くないほどに学術探究に没頭していたが、夜の八時半を迎える今になってようやく振り返りの時間を設けることができた。

科学に対する疑義。おそらくそれは消えることなく、私の内側に今後もあり続けるだろう。それは一つ健全な疑念であるように思えてきた。一方、今日は大学のキャンパスに一日中いながらにして探究活動を進めていたが、昼食前に図書館の中で、自分は科学者としての側面を持ちながら生きていこうと改めて思った。

科学者として生きようとすることの確からしさを疑うことは、もはや馬鹿げているように思える。仮にあと何度か科学者としての自己のあり方と生き方に疑いを挟むことがあったとしても、それらと向き合っていることを通じて、やはり自分は科学者としてあり続けるだろう。

どうしても自分は科学的な探究をやめることができない。この点については、これまで何度も何度も自分に問いを投げかけてきた。しかも、大抵の場合、それらの問いは、自己を打ちのめすような質感を持つものだった。だが、何度そのような問いを投げかけても、自己が起き上がってきたのである。もうそろそろ、自分の中にある科学者としての自己を認め、真に抱擁する時なのではないか、と思うに至った。

一昨日も、昨日も、今日も、科学者としての自分の無能さを目の当たりにしてきたし、明日も目の当たりにするだろう。自己の無能さが露わになる時に、笑うしかない自分が数年前から芽生え始めている。言うまでもなく、これは自己効力感という概念とほとんど関係のない事柄である。その概念を持ち出して説明するところに今の自分はいない。自分の無能さを自覚するというのは、ある意味、自分の無知さを自覚することに他ならない。

いつからか、どんな方法でどこまで検証しようとしても、自分の無能さと無知さをひっくり返す結果は出てこなかった。人間は意味を構築する生き物であり、どれほど意味構築活動を積み重ねていっても、無能さと無知さの外に出ることはできないのではないだろうか。そうであれば、私たちは意味を構築することを宿命づけられているのみならず、無能であり続けることと無知であり続けることを宿命づけられた生き物なのだと思う。

今日も何度も何度も、自分の無能さと無知さに向き合っていた。おそらく私は、無能さと無知さを自己から極限まで切り離そうと試みてきたがゆえに、それらは地球の外周を一周回ってきて再び自己に帰ってきたかのようである。それはとてもわかりやすい表現であり、その表現を飲み込んで見ると、肚まで落ちる。

なぜだか、自分はまた違う場所に辿り着いたような気がしている。無能さと無知の果てに足を踏み入れたことはあるだろうか。その場所では、自己の無能さと無知さが事実としてではなく、真理として存在している。そして、その場所はとても静かであり、その真理に直面すると小さな笑みがこぼれる。

自己がいかに無能であり、無知であるかを叫び続けた結果、地球の外周を回って再びその叫びが自己に戻ってきた経験はあるだろうか。その声を噛み締め、肚に落ちた感覚を持ったことがあれば、私が体験したのはそれと同じである。2017/10/9(月)20:43

No.279: Peripatetic Soul

In retrospect, I have lived in various places all over the world in the last 10 years. One might ask: “Why are you moving around all over the world so frequently?” My facetious answer would be: “Because my nationality is the earth” and “Because I hope to be a vagabond as a scientist, philosopher, and composer.” However, the most serious answer would be: “Our soul is intrinsically peripatetic.” 14:35, Wednesday, 10/11/2017

1635. 新たな友人

どこかで書き留めておこうと思っていたのだが、ここで書き留めておきたい。それは、フローニンゲン大学の二年目のプログラムに在籍する中で、一人の良き友人に恵まれたことである。幸いにも、現在履修しているコースを通じて、一人のオランダ人と友人となった。彼の名はハーメンと言う。

ハーメンは元々学校の教師であり、昨年教職から一旦離れ、教育科学を学び直すために今の学科に所属している。ハーメンは190cmを越そうかという恰幅のいい大きな男だが――後日話を聞くと、身長は2mもあるらしい――、自分自身のことを恥ずかしがり屋だと述べている。

ハーメンと私は偶然ながら履修している全てのコースが共通しており、一つの少人数のコースを除けば、彼はいつも教室の最後列に座っている。だが、ひとたびクラスが始まると、最後列からいつも洞察に溢れる発言を積極的に行うのがハーメンの特徴だ。

私がハーメンに、「なぜいつも教室の一番後ろの席に座りながら、積極的に発言をしているの？」と尋ねると、「他に誰も意見を言わないからね」と照れ笑いを浮かべながら答えた。

フローニンゲン大学のような研究大学の大学院に所属する学生たちが、これまで非常に厳格な学術訓練を受けてきたかことを実感することがよくある。学部を卒業してすぐに大学院に進学をしたばかりの者も多く身近にいるが、彼らにおいても、厳格な学術訓練を経てきたのだということを感じる場面が多くある。そうした中でも、ハーメンはひときわ、科学的な基礎知識と科学的な議論の作法を高度に身につけているように思える。

ハーメンと私はオリエンテーションミーティングの時に顔を合わせたぐらいであり、先週を迎えるまでは、お互いに挨拶程度しか言葉を交わしたことがなかった。だが、現在履修している、ある少人数のコースの休憩時間に、ひょんなきっかけからハーメンと話をすることがあり、そこで意気投合した。それ以降、先週末も、現在履修しているコースの課題について意見交換をするような仲になった。

とりわけ、先週から始まったコンピューターラボでの実習課題の難易度が高く、ハーメンの持っている統計学の知識には随分と助けられている。お互いに課題の設問に回答した後に、回答の記されたワードファイルを後日交換し、お互いにフィードバックすることを行っている。このフィードバックがなければ、私の分析や論証は随分と不十分なままであっただろうと思う。一緒に意見交換をしているのは、「評価研究の理論と手法」というコースの課題であり、これは二人一組で取り組むことが強く推奨されている。

60名ほどの履修者のうち、私以外は全てオランダ人であり、彼らは皆ペアになって課題に取組んでいる。私はあえて一人で取り組むことを選んだが、ハーメンとの意見交換には本当に助けられていると思う。実際には、ハーメンは別のパートナーと一緒に課題に取り組んでいるそうだ。今日、学内のカフェテリアで昼食を取ろうとしていたら、そこでハーメンに遭遇し、彼と一緒に課題に取り組んでいる男性を含めて、ランチを共にした。

ハーメンの相方の男性はリチャードという名前であり、私はてっきり外見から彼のことを教授だと思っていた。ハーメンと同じように、リチャードもいつも教室の後ろに座っており、リチャードは単に講義を聴講している教授だと思っていた。リチャードのこれまでの経歴については、まだ詳しく尋ねていないが、何やら彼はすでに教育政策に関する修士号を取得しており、今回のプログラムは二つ目の修士課程らしい。

私たち三人は意気投合し、これから一年間は、何かとお互いに支え合いながらプログラムをこなしていくことになる予感がする。2017/10/9(月)21:17

No.280: Optimal Academic Environment

I feel almost everyday that I am studying and researching with highly intellectual people at University of Groningen (RUG). The academic environment is impeccable and optimal for my work. Every researcher with whom I have worked with so far is very supportive.

He or she always gives me not only insightful feedback but also beneficial scaffolding so that I can foster my knowledge and skills at the next level. The more I spend my time at RUG, the higher I go up developmental ladders as a researcher and hopefully as a person. In addition to supportive professors, I cannot forget my friends at this university. Even though I am like a solitary Buddhist monk, I have a few friends at this university who make me feel at home.

This university is like my secure base, and in fact, I feel that I'm willingly to come back here in my future. That is why I may start a new challenge in a different country after the present program. 15:03, Wednesday, 10/11/2017

1636. 消えない灯火

今朝は六時前に起床し、六時から今日の仕事を開始した。昨日に引き続き、自分の内側に静かに燃え上がるものを感じる。昨夜は夢を見ることもなく、無意識の世界が音を立てずひっそりとしていた。そうした静けさの中に、自分の内側で静かに燃えるものの音が一層際立って聴こえる。

科学というものが「真」を扱う領域であるがゆえに、いつも私の中では対極にある「偽」という概念が頭をよぎっていた。その対極的な概念の存在ゆえに、どこか私は科学に対して不信に思っていた。しかし、昨日の一件は、科学を哲学や音楽と同等の位置に置くことのきっかけになったようだ。真善美を司る領域の探究に関して、それが一つの調和を奏でる日がやってくるのはまだ先のことだと思うが、そこへ向けての一歩をようやく踏み出したようだ。

科学・哲学・音楽のどれもを欠くことのない生活。それら三つの探究に献身し、それらを通じてこの現実世界に触れ、関与していく生活。そうした生活の実現に向けて、確かな歩みをまた始めた。

昨日は、「学習理論と教授法」のクラスの後に大学の図書館で学習を進めていた。その時に、改めて自分は、システム科学とネットワーク科学の二つの科学領域をこれからより一層探究し、自分の新たな専門性として修めたいという強い思いが再燃した。前者の中には、昨年から特に重点的に探究をしている、ダイナミックシステムアプローチ、非線形ダイナミクス、時系列データ解析が含まれる。後者については、昨年から独学で学びを深めている状況である。

発達科学の領域にとどまることをせず、人間の発達や学習に関する研究を進めていくときに、システム科学とネットワーク科学の考え方やアプローチは極めて有益である。昨日改めて、この一年間は、それら二つの科学領域の基礎をゆっくりと構築していこうという思いになった。

フローニンゲン大学での今年のプログラムは、特に前半の学期に、履修する必要のあるコースが詰まっており、なかなか他の探究に勤しむ時間がないが、後半の学期には履修するコースの数も減るため、個人的な探究時間が増えるだろう。その時にまた、システム科学とネットワーク科学の両分野を深く探究していく。昨年の研究に引き続き、今年の研究においても、システム科学の枠組みを用いる予定である。

新しい研究になんとかネットワーク科学の枠組みを用いることができないか、と現在考えている最中だ。いくら書籍や論文を読んでいても、実際の研究でそれらの枠組みを用いなければ、それらの分野の知識と技術が真に我がものになることはない、ということを何度も痛感してきている。自分の研究にそれらの枠組みを活用することを通じて、知識や技術を生きたまま学び、そこに血を通わす形で自分のものにしていく。

© YOHEI KATO 2018

ちょうど明日、昼食前に、今年の研究でお世話になろうかと考えている、ミヒャエル・ツショル教授と面会をする。ツショル教授からの有り難い申し出があり、明日は形式張って研究室で面会をするのではなく、学内のあるカフェで非形式的に面会をすることになった。

ツショル教授は、米国のいくつかの大学を転々としながら六年間ほど研究生活を米国で送っていた。お互いに米国の地である程度の年数を過ごしてきたこともあり、そこで培った共通のものがあるように感じている。おそらくこの点も、ツショル教授に親近感を覚えたことの一因かもしれない。ツショル教授との明日の面会も、自分の内側を新たに動かす重要なものになるだろう。2017/10/10（火）06:25

No.281: Timeless Time

Since I began to live in Europe, the transformation of my feelings has been gradually progressing.

I had a dream last night to represent the progress of the transformation. As I mentioned before, I often encounter “timeless time” in my daily life. It suddenly shows up. The most clearcut explanation to articulate the experience would be that it is as if we were in between minute particles of time.

I am not in the flow of time, but I am out of the flow. Time never flows, but we feel that time is flowing because our physical body and mind constantly move. In that experience, I feel touching the substratum of time that is motionless.

As I spend my life in Europe, everyday seems to silently pass by. On the other hand, the chance to encounter the timeless time increases. It actually indicates that I am living in between timeless time and time (full time). Since the transformation of my feelings enables me to see and feel what I have never seen and felt so far, it inspires awe in me.

I do not know how profound this phenomenal reality is. 16:25, Wednesday, 10/11/2017

1637. 科学としての教育学

昨日は、新たに友人となったハーメンとリチャードについて言及したように思う。リチャードとは昨日初めて会話をしたため、彼についてより深く知るのはこれからになるだろう。いずれにせよ、二人の人柄には大変好感が持てる。また、細かな関心領域は異なるが、教育という大きな括りで言えば、三人の関心は共通していると言える。こうした共通事項と相違事項が、お互いの関係性を深める上での重要な役割を担っているように思う。

昨日、コンピューターラボでの実習が終わり、私はその場に残って一人で実習の続きを行っていた。この実習では、統計ソフトのSPSSを活用することになっており、私以外の60名ほどの受講者は、学部時代にこの統計ソフトの使い方を習っているらしい。しかし、私はSPSSに触れたことがなく、統計ソフトに関してはRしか使えない。

この実習を担当する三人の教授たちもSPSSには精通しているが、Rには造詣が深くないようだ。最初私は、実習に参加している他の受講者が、私よりも随分と早く問いに回答していることに驚いていた。その理由としては、おそらく私がじっくりとケースの内容を理解し、問いの意図を何度も反芻しながら課題を進めているからだと思っていた。また、統計用語に関する知識がまだ十分ではなく、同時にRのプログラミンコードを自由自在に書ける段階にはないため、逐一文献やインターネットで調べながら課題に取り組んでいることも大きな要因だろうと思っていた。

ラボの時間が終わってもその場に残り続けていると、一人の受講者が帰り際に私に声をかけてきた。聞くところによると、ヨアンネという名前の彼女は小学校の教師をしながら今の修士課程に所属しているらしい。どちらもパートタイムで従事しているそうだが、このコースを含め、彼女も今学期に三つのコースを履修しているそうであり、教師としての仕事とこの修士プログラムをを両立させるのは、随分と苦労があるだろうと思った。

ヨアンネが私のPCのスクリーンを見ながら、驚いた表情を見せた。Rのインターフェイスとプログラミンコードを初めて見たとのことであった。そもそも課題の問いに回答する以前に、統計用語を調べてはメモし、プログラミングコードを調べてはそれを実行しと、ヨアンネから見ると私が何か別のことを熱心にしているように見えたそうだ。

彼女から話を聞いて驚いたが、SPSSでは自分でプログラミングコードを書く必要はなく、ボタン一つで統計解析ができてしまうらしい。昨年この事実をどこかで聞いていたような気がするが、私はRの応用範囲などを考えて、このプログラミング言語に習熟するようにしていた。

これまで課題に取り組む中で、様々な試行錯誤をしてきたが、そのおかげで随分とR言語に習熟してきたように思う。もちろん、自分の行いたい解析や操作を自由自在にできるわけではないが、少し調べれば、意図していることはほぼ全て実行できるようになった。具体的な課題に取り組みながら、実践を通じて学んでいくことの大切さを強く実感させてくれる。

SPSSについての話を聞いて改めて驚いたのみならず、ヨアンネが小学校の先生をしながら、この厳格な教育科学プログラムに所属していることにも驚いた。過度に一般化することはできないが、小学校の教員のみならず、中学校や高校の教員が、教育に関する科学論文を毎日読み、統計解析などを通じて教育を科学的に探究する姿をあまり想像することができない。

ヨアンネ曰く、パートタイムで並行しながら教育実践と教育研究に従事している教師はオランダでも少ないとのことであるが、私が驚いているのは、このコースを履修しているその他の受講者の多くが教師の経験を持っており、教職を離れてこのような科学探究に毎日打ち込んでいることだ。

ヨアンネ曰く、それは自分の教授法を科学的な裏付けのもとに洗練させていくためにも重要であり、なおかつ同僚の他の教師に科学的な知見に基づいた助言をするために必要である、とのことである。それを聞いて、妙に納得する自分がいたのは確かだが、教師のマインドセットに関しても、日本とオランダでは随分と異なるのだと実感した。

彼女の話を聞きながら、そういえば以前に友人のハーメンも、この件に関係するような面白いことを述べていた。私はハーメンに敬意を表しながら、「なぜ学校の教師をしていた者が、これほどまでに科学的な論証に慣れており、統計学の知識や手法にそれほどまでに習熟しているのはなぜか？」と尋ねたことがある。私の問いに対して、ハーメンは笑顔を交えながら、「教育学部で相応の教育を受けたらからだ」とさも当たり前のように答えた。彼らの意識はどうも、教育学を日本のように文系の範疇として捉えておらず、そもそも科学として位置付けているようなのだ。

ハーメン曰く、学部時代に、少なくとも三年間にわたって継続的に統計手法などの科学的なアプローチに関する講義を履修してきたそうであり、そうしたことも教育を科学的に研究することや、自説を科学的に説明することにつながっているのだと思った。

ヨアンネとの会話の後、しばらく経ってから、私もラボを後にすることにした。自宅への帰り道、日本の大学教育の質について改めて考えざるをえなかった。2017/10/10(火)07:42

No.282: Trinity of Science, Philosophy, and Music

I was murmuring before going to sleep last night that I would integrate developmental science, educational science, systems science, and network science into my scientific work. Exploring one or a couple of them is not enough. Only after each one of them unites into a coherent whole, my scientific work will start. Moreover, I will rigorously explore philosophy, in particular, philosophy of education and humanity. Finally, I will ceaselessly compose music on the basis of my previous academic work.

Coherency and unity of science, philosophy, and music can be established in my near future.
07:26, Thursday, 10/12/2017

1638. 振り出しに戻る夢

昨日は一昨日に引き続き、午後から就寝前にかけて、「評価研究の理論と手法」のコースの課題に取り組んでいた。この課題に取り組む過程は試行錯誤の連続であるが、何かを学ぶ上で、具体的な課題に取り組みながら試行錯誤すること以上に有益な学び方を知らない。

統計解析向けのプログラミング言語であるRを用いながらコードを書き続け、自分のコードがうまく機能し、解析結果が表示される瞬間には独特の喜びがある。プログラミングコードを書くことも、れっきとした創造行為であり、プログラミングコードを書くことは創造に伴う充実感を引き起こす。ただし、Rを用いてプログラミングコードを書くというのは、MuseScoreを用いて曲を作ることと全く同じように、一度始めると手を止めるのが難しくなってしまう。創造行為の本質である、「創造的中毒性」、あるいは「創造的没入感」がそこにある。

実際に昨日も、分析を終える予定であった時刻よりも一時間半を超えてRを触っており、結果として就寝時間が一時間弱伸びてしまった。そうしたこともあってか、今日は普段よりも遅い七時に起床することになった。

今日は午前中に「実証的教育学」のクラスがあるため、起床直後にシャワーを浴び、最初に身支度をした。身支度の最中に、昨夜見た不思議な夢について振り返っていた。色々と不思議な場面が出現した夢だった。とりわけ、三つの場面について覚えている。一つは、私が日本の大学にいて、新しくその大学に入学してくる者たちの入学式に立ち会う場面だった。

私がその大学にこれから入学するのではなく、どうやら自分はすでにその大学に在籍しているようであり、学部生の入学式に立ち会っていた。会場には新入生のような学生や、新入生には見えない学生、そして社会人の姿も散見された。

式の行われる講堂には、まだ人がまばらにしかいない。全員が空いている椅子に腰掛け、一言も声を発することもなく、式の開始を静かに待っている。平坦ではなく、緩やかな傾斜を持っているこの講堂内を見渡し、私は空いている席に座ることにした。腰掛けた直後に、そもそも入学式など開催されないかのように、講堂内の人々が席を立ち、ゆっくりと講堂のステージの脇にある出口から出て行き始めた。

その様子を見て、私は特に何も考えることをせずに立ち上がり、緩やかな傾斜を下りながら出口に向かった。出口の中に入ると、連続した夢でありながらも、少しばかり場面が変わった。出口の外には、螺旋階段のようなものがあり、私は階段の上を見上げた。そこは一階だったはずなのだが、なぜだか上に行く螺旋階段と下に行く螺旋階段が見えた。

私の近くにいた見知らぬ学生たちがゆっくりとその階段を下りていく。その螺旋階段は、一本のポールの周りに建設された作りになっていた。私は階段を一段一段降りていくよりも、このポールにつたって一気に下まで行こうと思った。ポールに捕まり、自分の体が螺旋階段の作りのように回転しながらゆっくりと下に向かって進んでいった。

螺旋階段の一番下まで辿り着くと、そこには扉があり、それを開けた。そこには、この大学の何気ないキャンパスの風景が広がっていた。あの螺旋階段は何だったのだろうかと振り返りながら、私は学

© YOHEI KATO 2018

生支援課に向かった。ここは日本の大学であり、先ほどまでは日本人しか見なかったが、私の目の前には韓国人と中国人の学生の姿が見えた。

早足で歩いていた私は、彼らを追い越し、学生支援課のある棟に入った。すると、追い越したはずの学生が私の後をつけているかのような感覚があったので、歩く速度をさらに速め、結局は小走りをして、学生支援課のある棟を通り抜けた。気がつくと、先ほどの式典会場である大学講堂の前にいた。講堂の中に入ると、先ほどと全く同じ光景が広がっていた。何かが振り出しに戻ったような、あるいは、時間の流れを逆に進んだような感覚があった。2017/10/11(水)08:15

No.283: Symbolization

During dinner yesterday, I reflected upon what I am doing everyday. I realized that I engaged in symbol-making everyday. Both writing academic papers and composing music are the examples of symbol-making.

Then, I was wondering about the pre-existence that is symbolized. The fact that I can make a symbol implies that something pre-exists before being symbolized. Since I make a numerous number of symbols everyday, an infinite amount of unsymbolized existence permeates this reality.

When I discovered this fact, I was struck with awe toward such a myriad of unsymbolized existence. At the same time, I thought that one of my roles was to symbolize and animate it that has never been symbolized by someone else before. 09:05, Thursday, 10/12/2017

1639. 時の螺旋階段

先週と同様に、今週も天気が優れない。今日も小雨が降ったり止んだりを繰り返していた。

これから夕方の仕事に取り掛かる前に、少しばかり今朝の夢を振り返っていた。今朝の夢は、時間を逆行し、振り出しに戻るような感覚を引き起こすものだった。

欧州での生活を始めて以降、時々、時間の淵に挟まるような体験をする。時間単位を微粒子の次元まで小さくし、一つの時間と次の時間の隙間に入り込む感覚と言ったらわかりやすいだろう。そこ

では時間など流れていない。時間の微粒子の中にいるのではなく、その外側にいて、一つ一つの時間単位の狭間にいるのであるから、時間が流れ ていないように感じるのは当然なのかもしれない。

時間が流れていない感覚だけではなく、今日の夢は、体験上時間を逆行させることが可能であることを十分に示唆するものだった。夢の中に現れた奇妙な螺旋階段。それが目に入った時、私は上に上がろうとする意識が無意識的に生じた。それはおそらく、螺旋階段という物体は、真っ先に「上るもの」という情報を私にアフォーダンスしてきたからだろう。

だが、そのアフォーダンスに従順に従うのではなく、私は一瞬立ち止まって考えていた。「この螺旋階段は何なのだろうか？それは何のためにここにあるのだろうか？」というシンプルな問いが自発的に湧き上がり、それを無視することなく、私はその問いと少々向き合っていた。すると、その螺旋階段には上るための階段のみならず、降りていくための階段が備わっていることに気づいたのである。螺旋階段を降りていくプロセスは、時間の流れを逆に進むためのものだったのかもしれない。

今、時間の流れを逆に「進む」と述べたが、この表現もどこか奇妙だ。螺旋階段を降りている最中に、進んでいる感覚などなかった。確かに、私の身体も心も動き続けていたことは確かだが、何かに向かって進んでいるという感覚はなかった。人間は、時間の中を進むことなどできない。その代わりに、時間の中で動くことはできる。そのようなことをふと思う。

そのようなことを考えていると、時間とはもはや、進むものでも、戻るものでもなく、人間存在と同様にそこにあるもの、なのではないかと思う。ただあるだけなのだ。

時間そのものは初めから一切動いていなかったのだ。さらには、自己の存在の基底も時間と同様に、一切動くものではない。単に私たちの身体や心が運動を続けているだけなのだ。そうしたことが、時間や自己の基底も動いているものだと錯覚させる。

また、螺旋階段を降りてみた時に、再び先ほどと同じ光景が広がっていたことも興味深い。自分の身体が再び同じ場所にあり、時間が後戻りしたように最初は思えた。だが、逆行したのは時間ではなく、私の身体と心だった。それらを総合的に考えると、時間の粒子の間にいる感覚とは、流れるこ

とのない時間の中にいる感覚であり、自己の基底に触れている感覚だと言い換えることができるかもしれない。

書斎の窓から見える木々が、少しばかり強い風になびいている。今は雨が止んでいるが、空は薄暗い。

欧州での生活が一日一日と経過していくごとに、全く経過しない不動物に触れる体験の回数が増えて行く。この現象世界を生きていくための諸々の感覚が変容を遂げていく。感覚の変容に応じて、この現象世界は、これまで私が全く見えなかった、あるいは、感じられなかった現象を開示する。それぐらいに、この現象世界は深遠なものを内包している。2017/10/11(水)16:05

No.284: Explaining through Writing or Vice Versa

Finally, I finished my work today. I spent most of my time in tackling an assignment by using R. I will start to write my paper for a school improvement plan. I hope to finish writing it the day after tomorrow.

Once I complete the draft of the paper, I can focus on the coming exams. Two of three courses in the first half of this semester require an examination. From my experience, just reading the course material does not cultivate my understanding deeply. I will write down concepts and theories that I learned in the courses, and writing in this process should be done as if I explained to somebody or myself. Explaining through writing or vice versa is a powerful learning method. 20:46, Thursday, 10/12/2017

1640. コース課題の進捗

昨日もまたここ二日間に引き続き、プログラミング言語のRと向き合いながら、「評価研究の理論と手法」の課題に取り組んでいた。私は今週一番の月曜日のコンピューターラボに参加したのだが、どうやら私以外の多くの受講生も今週の課題には苦戦していたようだ。それを示すかのように、実習の最中、ラボを取りまとめていた講師に対する質問が止むことはなかった。他の受講生は、SPSSと

いうその他の統計解析ソフトを使っており、Rのようにプログラミングコードを書く必要がないために、その点において苦戦することはないだろう。

私は、課題の問いへのアプローチを考えることだけではなく、どのようなプログラミングコードを書いていくのかについても考えなければならず、二重の意味で思考作業が増加していた。しかし、このおかげで随分と課題が要求する概念のみならず、Rに関する理解も深まったように思う。また、じっくりと一つの問いと向き合うという辛抱強さのようなものを涵養してくれる優れた機会になっている。

コンピューターラボでの課題が毎週提出され、課題の問いに回答して、翌週の月曜日の午前九時までに担当教授に回答を提出するという流れになっている。ただし、今回の課題は、私のみならず、多くの受講生にとって難解であったらしく、課題の提出期限が一週間伸びた。課題の提出期限が延びたとはいえ、ここから11月の第二週までは、学術研究の仕事のみならず、企業関連の協働プロジェクトに関する仕事も複数入っているため、予定通りにこの課題を終わらせようと思う。

昨夜の段階で、一通り全ての分析作業が無事に終わり、全体を通して今回の分析結果が意味することは何なのかをまとめればいいだけとなった。昨日の「実証的教育学」のクラス終了後、友人のハーメンを捕まえ、彼にあれこれとこの課題について質問をし、課題解決の糸口を得ていた。

今日は午前中と午後に、日本企業との協働プロジェクトに関する打ち合わせが入っているため、この課題については夕方までにドラフトを完成させ、ハーメンにドラフトを送ろうと思う。週末にお互いのドラフトについて意見交換をし、来週のコンピューターラボでは最後の課題に取り組めるようにしたい。

この課題に関するドラフトが仕上がれば、明日と明後日は「実証的教育学」の最終課題に集中することができる。この課題は学校改革に関するものであり、一つの学校をケースとし、その学校の問題分析、介入手法の選択と実行戦略、介入手法の効果のモニタリングプランなどを、教育科学者に向けてではなく、教育関係者にわかりやすく伝えるレポートの作成と、選択した介入手法の科学的根拠について説明する、教育科学者に向けた論文を執筆するものである。

それら二つを合わせると、小さめの修士論文ほどの分量になる。しかし、すでに二つの文章の大枠を作成していたため、明日からの二日間で最初のドラフトを完成することができるだろう。このドラフ

トが完成すれば、今学期の課題に関してはだいぶ落ち着くことになる。あとは二つのコースの最終試験に向けて、再度課題文献を読み込んでいけばいいだけとなる。今学期はとりわけ濃密な時間だったように思う。2017/10/12（木）07:51

No.285: My Mantra

Writing, writing, and writing. This is a kind of my mantra every day. I want to ceaselessly write scientific papers in my near future. The feeling derives from my intrinsic motivation, and it is irrepressible.

My passion as a scientist is to integrate developmental science, educational science, systems science, and network science. I have explored developmental science over six years. I am currently engaging in educational science. In order to delve into the processes and mechanisms of human development and learning, I need more robust knowledge and skills of systems science and network science.

In parallel with my current coursework, I will spend my extra time in cultivating my knowledge and skills of systems science and network science. Although I may not be able to secure enough time, I want to make gradual progress.

One university in the US, which I plan to apply for a visiting fellow position, would be an ideal place to make me pursue my passion to integrate the four scientific domains. 08:21, Friday, 10/13/2017